


これがわたしの
旦那さま 1

市尾彩佳
Saika Ichio



レジーナ文庫




登場人物
紹介



シグルド ▲

23歳。ラウシュリッツ王国国王。
異母兄が亡くなったため
突然国王に。国王としての
プレッシャーに日々苦しんでいる。




シュエラ ▲

18歳。貧乏伯爵家の長女。
国王の側近であるケヴィンに誘われ
愛妾候補として王城に上がることに。




エイドリアン ▲

シュエラの幼馴染で、初恋の人。
国王を守る^{このえ}近衛隊士の一人。




ケヴィン ▲

シグルドの^{いとこ}従兄で、第一の側近。
シュエラの実質的な後見人。



▲ フィーナ&カチュア ▲

シュエラ付きの侍女。はじめは
シュエラに反発していたが……



ヘリオット ▲

シグルドの近衛隊時代の仲間
で第二の側近。一見お調子者だが……

目次

| | |
|----------------------------------|-----|
| 愛妾 <small>あいしやう</small> への道のり | 7 |
| 国王であるということ | 107 |
| 愛妾生活前途多難 | 210 |
| ケヴィンが見た新しい始まり | 314 |
| 愛妾 <small>あいしやう</small> への道、未だ遠し | 381 |

愛妾への道のり

1 これがわたしの旦那さま

ここから、わたしの新しい人生が始まる――

――ラウシユリッツ王国王城。

「クリフォード公爵トマス殿」

名前を呼ばれ、壮年の男性が歩き出す。シユエラはそのあとに続いて、謁見の間に足を踏み入れた。

玉座までまっすぐ敷かれた絨毯の赤さが、緊張でがちがちになったシユエラの胸の鼓

動を煽る。

しとやかにしずしずと、あごを引いてうつむき加減に、視線は足元から七、八歩先の床へ。公爵に追いつけないからといって、決して大股に歩いたり小走りになったりしてはいけない。

心の中でぶつぶつとつぶやきながら、公爵の足が視界から消えそうになる度にその焦りを呑み込む。

先に玉座の前にたどりついた公爵は、少し振り返ってシユエラの到着を待っていた。シユエラが斜め後ろで立ち止まると、公爵は前を向いてひざまずく。それに合わせてシユエラも、新緑色のドレスのスカートをつまんで最上級の礼を取った。

「謁見の栄誉をいただき恐れ至極に存じます。国王陛下におかれましては……」

美辞麗句を並べ立てる公爵の声が耳に入ってこない。際限なく高まる緊張、慣れない姿勢。シユエラの神経は今にも焼き切れそうだった。

「こちらに参らせました女性は、ハーネット伯爵令嬢シユエラと申します」

この言葉にはっと我に返り、シユエラは一層腰を低くした。

ふわりとふくらんだドレスの中の足は、無理な体勢にぶるぶる震えている。片足を後ろに下げ、膝を床に限りなく近づけるけれど、決して床につけてはいけない。声をかけ

られるまでこの姿勢でいなくちゃならないなんて、拷問に等しい。

「シユエラの母はシユエラを筆頭に十四人もの子どもを産んだ女性で、シユエラも母に似て健康的な体つきをしております」

公爵の堂々とした口上に、シユエラは頬を赤らめた。

ここは公の場で、いるのは国王だけじゃない。絨毯の両脇にはたくさんのお客の男の人たちが並んでいる。こんな場所で女性の体のことを話すなんてマナー違反だ。

胸や腰に視線が集まるのを感じて、顔から火を噴く思いだった。

……けれどわかっている。シユエラにはそれくらいしかとりえがない。

貴族たちが遠慮なくシユエラを眺める中、頭上からあざれたような声が降ってきた。

「そんなに産める必要はないだろう」

このような言葉が返ってくるとは思わなかったようで、クリフォード公爵はしどろもどろになる。

「えー、それだけではございませんでして、シユエラの兄弟はシユエラを除いてみな男なのでございます。まことに見事な男系の血筋といえましょう。多産で男系しかも健康、お世継ぎをもうけられるにはこれ以上ない女性かと存じます」

おお……、と誰かがつぶやく声をきっかけに、ささやきがあちこちから聞こえてくる。

謁見の間全体がざわざわと波立っているようだ。声は小さく、大勢が話しているので聞き取れない。何か嫌なことを言われているのではないかと気になって落ち着かなくなってくる。

そろそろ足も限界だ。早くこの謁見が終わってほしいと心から願う。

願いが聞き届けられたのか、玉座の方から直接声をかけられた。

「娘、面を上げよ」

忘れかけていた緊張が再び走った。シユエラはがさつに見えないようにゆつくりと体を起こし、数段ある階段の先を見上げた。

背もたれの高い、赤と金の玉座。肘掛けに頬杖をついて、やる気なさげにシユエラを見下ろす青年がそこに座っていた。

金糸と銀糸で刺繍された青紫色の衣装、動物の毛を縁にあしらったマント。頭に載せられた細く輝く輪。金色がかった茶色の髪に群青色の目の、精悍な顔つきをした若き王。姿勢をそのままに王は目を細め、鋭い視線をシユエラに向ける。

ラウシユリツツ王国第十二代国王シゲルド。

この方がわたしの旦那さまになる――

国王ににらみつけられながらも、シユエラはぼんやりとそんなことを思っていた。

2 新生活スタートにおけるあれやこれや

シユエラの父であるハーネット伯爵は、ラウシユリツツ王国の東部中央に所領を持つ。王国内で末席とはいえ上級貴族として目される身分であるため、所領はそこそこ広く、それなりの税収があった。

しかし上級貴族としての体面を保てる程度に裕福だった暮らしは、突然終わりを告げる。

五年前、隣国への軍の派遣に反対したかどで父は官職を罷免され、それによって得ていた収入を失った。また、管理を任せていた者たちの裏切りによって、所領はろくに手入れもされずに荒れ果てており、領民の暮らしは不当な税の徴収によって困窮を極めていた。

王都にあった邸を引き払い、逃げるように所領に移り住むこととなった一家は、その

復興のために切り詰めた生活を送ることとなる。

裏切り者たちが着服した金品を持って行方をくらましたため、父伯爵は王都から持ってきた財産を所領の整備に投じることにした。所領の邸内に残っていた金目のものも売り払い、使用人に暇を出して、平民と変わらない生活を始めた。

伯爵夫妻と子ども十四人、給金はいらなからと言って残った執事と乳母で、家族は総勢十八人。所領からあがってくる収入はほとんど所領の管理と整備に投じ、一家の暮らしのために取っておくのはほんのわずか。母と乳母とシユエラは裁縫で内職をし、弟たちも手紙の代筆や商家の子どもの家庭教師などで稼いでいたが、すすすすく育つ少年たちの食費は日に日にかさんで家計を圧迫していた。

内職するより身分を隠して働きに出た方がお金になるんじゃないだろうかと思シユエラが思い始めた頃、この話は舞い込んだ。

『陛下には愛妾が必要です』

その言葉を聞いて、シユエラは実家への援助を条件に、国王の愛妾として王城に上がることを決意した。

西館に部屋を賜り、謁見の間からの退室を命ぜられた。

クリフォード公爵に続いて謁見の間を出たシユエラは、こっそりと細長いため息をつく。

王城に入ったのも初めてならば、国王に目通りしたのも初めてだ。無事に謁見が済んで、ほっとするあまり体の芯から力が抜けそうになる。でもこんなところでへたり込むわけにはいかない。ぐっと足に力を入れて前に進む。

謁見の間がある本館から西館への連絡通路に差し掛かったところで、背後からせわしない足音が聞こえてきた。

「シユエラ！」

聞き覚えのある声に、シユエラはぱっと振り返る。

遠くから声をかけてきた男性は、急ぎ足であったという間に側まで来た。

「エド兄さま」

薄い金髪に澄み渡った青い瞳を持つ優しげな顔立ちをした青年は、シユエラの隣に立つクリフォード公爵に腰を折って頭を下げる。

「お久しぶりにございます」

「おお、エイドリアン。元気にしておったか？」

「はい。おかげをもちまして。……あの、申し訳ありませんが、シユエラ嬢と少し話をさせていただいてよろしいでしょうか？」

少し顔を上げたエイドリアンは遠慮がちに申し出る。あごにひげをたくわえたクリフォード公爵は、そのひげをなでつけないがらにこにこと笑った。

「そういえばそなたらは幼馴染だと言っておったな。構わんよ」

「ありがとうございます。では少々失礼いたしました……」

エイドリアンは目配せでシユエラを促し、連絡通路から脇に外れる。シユエラはそれについていった。

エイドリアンとは幼い頃に家同士の交流があり、兄妹のいないシユエラにとって頼れる兄のような存在だった。

しかし五年前の父の失脚によって両家の交流は途絶えた。国が隣国の戦乱から手を引いて三年たつが、戦争が終わってからも顔を合わせることはなかった。

シユエラが今十八歳だから、エイドリアンは今年二十七歳になる。彼は最後に顔を合わせた五年前より少し顔がやせて、ぐっと大人っぽくなっていた。

シユエラの一家が所領に移り住んだ後に、再び戦場に赴いたと友人からの手紙で知らされていたので、戦場から兵が引き揚げてくるまでの二年間、ずっと心配だった。

その後の手紙で無事戻ったことも知っていたけど、こうして再会できた今、改めてうれしさがこみあげる。シユエラの心は弾み、顔が自然にほころんできた。

エイドリアンは連絡通路のすぐ側にあった生け垣に寄ると、振り返る。

その表情は厳しかった。

「どうしてここに来たりなんかしたんだ」

怒ったような低い声と責める瞳に、シユエラの笑顔は消える。

王城に上がることをシユエラは事前に知らせていなかった。手紙を出すにもお金がかかるし、どうせ会えるなら必要ないと思ったからだ。

「愛妾になるというのがどういうことなのか、わかっているのか？」

エイドリアンの言いたいことはすぐにわかった。

ここラウシュリッツ王国では、一人の男性には一人の女性しか嫁げないと定められている。二人目の妻を持つことは許されず、愛人という存在もまた嫌われ、蔑まれていた。

そんな中、国王だけは血統の存続のために、正式な妻の他にも女性を側に置くことを慣例として認められている。それが愛妾だ。

しかし慣例として認められているとはいえ、愛妾は愛人と同じ。存在は認められても、悪印象だけはぬぐえない。人々から軽蔑されて、日陰者のように見られる。

そして愛妾あいしやうは夫たる国王と正式な婚姻を結べない。何故ならずで王妃という妻が存在するからだ。

エイドリアンの心配はもつともだ。けれど五年ぶりなのだから、少しくらい再会を喜んでくれてもいいと思う。

シユエラはそっぽを向き、口をとがらせた。

「わかつてるわ。わたしもう、十三歳の子どもじゃないのよ？」

「だったら何故？」

目を吊り上げて怒るエイドリアンに、シユエラはふてくされて言った。

「だって、家にいたってお嫁に行けそうになかったんだもの」

貴族の娘ならば十八にもなればとくに嫁入り先が決まっているものだ。けれどシユエラには一切そんな話がなかった。父が失脚し家が貧乏になったため、持参金を出すことができないからだ。それに失脚した家と縁続きになりたくないのか、身分を望む商人や後添えを欲しがっている貴族からの縁談話も舞い込まない。そういう事情だから、今後も縁談が舞い込んでくる可能性は低い。結婚するアテがなく、このまま実家で暮らすくらいなら、日陰の身と言われても愛妾あいしやうになつて実家を出た方がいいんじゃないかと思つたのだ。……話を持ってきた人が父の失脚のことを知らないわけではないと思うので、

シユエラが愛妾あいしやうになることに問題はないのだろう。

シユエラの家の窮状きゆうじやうを思い出したのだろう。全身から発していた憤りいきじりを、エイドリアンは呑み下すように引つ込める。

後悔と心配が入り混じつた表情をしたエイドリアンを励ますように、シユエラは明るく笑つた。

「大丈夫だつてば。考えてもみてよ。国王陛下が旦那さまになるのよ？　すごいじゃない」

「シユエラ……」

エイドリアンは額を手で覆い、うなだれる。あきれすぎて言葉が見つからないのだから。冗談のつもりだったけれど、余計心配をかけてしまったようだ。

シユエラは肩をすくめる。

「それに、ここに来ればエド兄さまに会えるんじゃないかと思つたの」
顔を上げたエイドリアンに、シユエラは目を細めてほへんだ。

戦場での功績を評価されたエイドリアンは、近衛隊このゑたいに入隊することとなり、国王の側で警護けいごにあたっていると聞いていた。

青色のジャケットに銀糸の縁取りかみどがされた近衛隊の制服がよく似合う。再会を期待していたが、こんなに早く叶うなんて。

「戦場から無事に帰ってきてくれてよかった。……久しぶりに会えてうれしかったわ、エド兄さま」

これ以上公爵を待たせるわけにはいかない。シュエラは言葉を失ったままのエイドリアンを置いて、連絡通路へと戻った。

案内された部屋は、修繕を繰り返しながらだましまし使っているシュエラの邸とは、比べ物にならないくらい豪華だった。

王城なのだからシュエラの家より豪華で当たり前だけど、ここまで差があると「素敵な部屋がもらえてうれしい」という気持ちより、「こんなすごい部屋を使わせてもらっているの……？」という気持ちが先に立つ。

色味の違う細かい板をいくつも組み合わせて幾何学模様を描いた床。同じような模様が彫り込まれたテーブルと椅子。部屋の隅には、見るからに柔らかなソファが置かれている。

奥にある扉の隙間からちらっと見たところ、この部屋は応接室としてのみ使われるらしく、向こうには寝室だけでなく衣裳部屋まで別についているようだった。部屋一つの大きさは実家でシュエラが使っていた部屋とそんなに変わらないけれど、実家では就寝

から着替えまで一部屋で済んでいたものが三部屋にも増やされて戸惑ってしまう。しかも衣裳部屋には、クリフォード公爵家が用意してくれたドレスが次々と運び込まれている。

シュエラは椅子に座ってお茶を飲みながら、その様子を居心地悪く眺めていた。

ここまでしてもらっているのかしら？

ティーセットが載ったワゴンの上には、砂糖にレモンにミルク、蜂蜜がふんだんに用意され、テーブルの上には一人ではとうとうい食べきれない量の焼き菓子が並べられている。

なのに、お茶の席に座るのはシュエラ一人。

おかわりを聞かれて断ると、紺のワンピースにエプロンをつけた侍女はテーブルの上を片付けてワゴンを下げる。つましい食生活をしていたシュエラは、「残したお菓子はどうなるのかしら？」と思い、うっかり物欲しそうな目で見送ってしまった。

夕食時も、数種類のパンが詰められた大きなかごが、テーブルの中央にどっかりと置かれる。

こんなにたくさん……二人でも食べきれないわ。

椅子に座ってぽかんとしていたシユエラは、はっと我に振り返りに立つ侍女に言った。
「も、もう十分よ」

声をかけられて、シユエラの前に置かれた皿にサラダを盛りつけていた侍女は手を止める。

皿には新鮮な野菜が山のように盛られていた。

サラダがこぼれないように慎重に盛りつけていた侍女は、取り分けに使っていたトンダを木のボウルの中に置き、両手で持ち直してワゴンへと運ぶ。ちらつと見えたボウルの中には、まだサラダがたくさん残っていた。

陛下はたくさん召し上がる方なのかしら……？

しかしテーブルの上には、一人分の食器しか用意されていない。

「あの、陛下は……」

ボウルをワゴンに置いて侍女の列に戻ろうとする少女に、シユエラは声をかける。彼女は聞こえなかったかのように、列の端に並んで他の侍女と同じようにつんとすまして立った。

どうしたらいいのかしら……？

シユエラは目だけをちらつとワゴンに向ける。

二つのワゴンにぎゅうぎゅうに置かれたいくつもの容器。キルトの覆いが被せられているから中にどれだけ入っているかわからないけど、パンやサラダの量から考えてもほんの少しということはないだろう。

どう考えても一人分の量じゃない。けれど席はシユエラの分しか用意されていない。

悩んでいると、侍女の一人が口を開いた。

「どうぞお召し上がりください」

つつきんどんに言われ、夕食も一人なのだ納得して、シユエラは黙々と食べ始めた。サラダの次にじゃがいものポタージュスープ、子羊のグリル、チーズが順々に供される。実家では保存用のパンと、具がごろごろしたスープとチーズだけ。それも自分たちで用意するから、食事は食べ始める前にすべて食卓に並べる。弟たちの世話をしながら食べていると、スープが残り半分になった時にはすっかり冷めてしまっているということも少なくなかった。

ここでは手間暇かけて作られただろう上等な食事を、食べる順番に保温器から出してもらえる。パンも焼き立てなのか、ほのかに温かく柔らかい。

美味しいものを温かなうちに食べられるしあわせ。

家族にも食べさせてあげたいとしみじみ思う。

二つの思いがこみ上げてきて涙ぐみそうになったシユエラに、斜め向かいに並んでいる侍女たちが変なものを見るような目を向けてきた。

ここまで豪華ではないにしろ、王都に住んでいた十三歳まではシユエラの家の食事はこんな感じだったと思う。だからそれに感動するシユエラの方がおかしいことは、一応自覚している。

侍女はこの場に五人いるけれど、その誰にも話しかけられそうになかった。皿の上げ下げやおかわりなど、自分たちに必要な事柄は聞いてくるのに、声をかけたくてシユエラが視線を合わせようとしても、ふいと目をそらしてしまう。

そこはかかない悪意を感じる。

仕方ないこともかもしれない。特に女性の目には、愛妾あいしやうは不快な存在に映るのだろう。途中から話しかけることをあきらめて、シユエラは懸命に食事を口に運んだ。

残したらもつたない。

だけで食べすぎて息が苦しくなってきたところで、シユエラはどうとうあきらめた。

デザートを断り、体を反らせてお腹の苦しさをまぎらわせるシユエラに、侍女の一人が眉をひそめる。

「わたくし、こんなに食べられないの。次の食事からはもっと少なくしてもらえるかし

ら？」

侍女たちを見回しながら言ったけれど誰も視線を合わせてくれなかったので、シユエラの言葉を受け取ってくれたかどうかさっぱりわからなかった。

テーブルから食事が片付けられると、侍女のうち二人はワゴンを押して出ていき、もう二人は寝室に入ってしまった。

残った一人と会話ができないことに気詰まりを覚えながら、これから何をするのだろうと椅子に座ってじっと待っていると、しばらくして出ていった侍女たちが大きな台車を引いて戻ってきた。

木でできたバスタブが載ったその台車を寝室に運び込み、それから大きな瓶の載ったワゴンを運びこまれる。その時間こえてきた盛大な水音。音がやんだと思ったら、すぐにワゴンが廊下に戻る。その繰り返し。侍女たちが次々と廊下からワゴンを運び入れることができるのは、他の誰かが部屋の入り口までワゴンを運ぶのを手伝っているからだろう。

そのようにしばらくばたばたとしていたが、ワゴンの行き来がなくなり静まり返ったかと思うと、寝室から出てきた侍女がふんとした様子でシユエラに告げた。

「ご入浴の支度が整いました」

バスタブが運び込まれたところでわかっていたけれど、改めて言われてシユエラの胸はどきんと大きく打つ。

水も、水を沸かすための薪も貴重だから、入浴なんて減多にできるものじゃない。普段は水で手足を洗うのみ。よくて水やお湯で絞った布を使い、体をふくくらい。

だけどこの一週間、シユエラは滞在したクリフオード公爵邸で、毎日入浴して体をすみずみまで洗われ、磨かれた。

それもすべてこの日、今宵のため。

にわかになら高まつてきた緊張にかちこちになりながら、シユエラは椅子から立ち上がり寝室へと向かった。

大きなベッドが置かれていてもまだたつぷり余裕のある寝室に、バスタブの台車が車輪を木の輪留めで固定されて置かれている。その横には踏み台が置かれ、踏み台の手前には幾重にも折りたたまれた大きな布が敷かれていた。

「靴をお脱ぎになって、こちらにお乗りください」

言われた通りにその布の上に立つと、侍女たちはシユエラの衣服を脱がしにかかる。

正直、この習慣はどうにも慣れない。他人の前ではもちろんのこと、所領に移り住んだ十三歳の頃には、母にも乳母にも肌を見せることはなくなっていた。

クリフオード公爵邸で最初に脱がされた時、シユエラは必死に抵抗したものだ。伯爵家ほどの身分のある家の娘が着替えも自分で行っていると知り、公爵家の人々はあきれ返った。

自分の高い女性に着替えも入浴も侍女に任せるものだとか教諭されたが、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。

髪飾りを外され髪をほどかれたシユエラは、踏み台を使って逃げるようにバスタブに浸かった。

泡立てられた湯の中に身を沈めると、二の腕まで袖をまくった侍女たちに取り囲まれ、全身をくまなく洗われる。洗い終わるとまず最初に髪をすすがれ、立ち上がるよう言われる。立つと体の泡を流され、侍女たちに両脇を支えられて、片足ずつ洗い流してバスタブから出る。

布の上に降りると、今度は布を手にした侍女たちに寄ってたかって体をふかれた。一人が布で髪を覆って水分を絞っている間に、他の侍女が体をふき夜着を着せていく。一人でしていたらこうはいかないだろうという早業で、シユエラは湯冷めすることなく

イトガウンまで身につけることができた。
 シュエラは化粧台の前に移動するよう促され、寝室の隅の大きな鏡の前に座る。侍女が二人がかりで髪を布に挟んでばんばんと叩く。その間に他の侍女たちがバスタブを寝室の外へ運び出し、入浴に使ったものをてきぱきと片付けていく。

髪がわずかに湿り気を残す程度に乾いた頃、腰まである髪に油をなじませられ、歯の粗い櫛で丁寧にすかれた。

それからシュエラは、ベッドに入るよう言われ、横たわるとなめらかな肌触りのシーツに包まれた毛布をかけられる。

侍女たちはベッドの横に並び、同時に頭を下げた。

「それではおやすみなさいませ」

「あ、はい……おやすみなさい」

シュエラがももごとつぶやいた言葉など、侍女は誰も聞いていないだろう。順番に出て行き、ぱたんと扉が閉められる。

寝室は、先ほどまでの忙しさが嘘みたいに静まり返った。

侍女たちに振り回されるように世話をされ、いつときは忘れることができた緊張がふ

たたび頭をもたげてきた。

新妻の心得は知っている。

夫を肅々と迎え、あとは夫に任せること。——ってぜんぜん参考にならない！

新婚初夜がどういふものなのかわからないのに、心構えもへつたくれもない。どうして誰もこんな大事なことを教えてくれないのか。

シュエラは頭をかきむしりたい衝動に駆られた。が、すんでのところで我慢する。せつかくつやが出るまでくしけずってもらったのに、乱してしまっはもったいない。

手入れが行き届いたおかげか、所領にいた頃は縮れてまとまりが悪かった栗色の髪は、細かなウェーブがかかった美しい髪へと変貌を遂げていた。髪が見違えたようになったのは、公爵の邸に滞在して三日目のこと。「どんな魔法を使ったの？」と聞いて、その場にいた人全員に笑われた。

コンプレックスだった髪は今では、自分の容姿の中で一番好きだった水色の瞳よりお気に入りで。

陛下はこの髪を気に入ってくださいるかしら？

シュエラは体を起こし、隣の部屋に続く扉をじっと見つめた。

国王はこの扉から入ってくる。しかしいくら待っても扉は開かれない。静まり返った

まま、隣の部屋に誰かが訪れた様子もない。

お忙しいのかしら？

シユエラは起き上がり、ベッドの端に腰掛けて、気持ち落ち着けるために深呼吸した。夜は長い。今から気を張り詰めていては保たない。

繰り返すうちに、少しずつ強張っていた肩から力が抜けていく。

ガチャ、という扉の開いた音でシユエラは目を覚ました。

はっとして起き上がる。たった今までくるまっていた毛布が、体からずり落ちた。

「あ……これ？」

寝室に入ってきたのは侍女たちだった。

「おはようございます」

扉の前に並んで行儀よくあいさつした侍女たちは、寝室のあちこちに散っていく。

分厚いカーテンが柱の陰にまとめられると、窓ガラスの向こうから透き通るような日の光が差し込んできた。

朝？

いつの間にか眠ってしまったらしい。シユエラは呆然とする。

まさか、国王はシユエラが眠りこけていたので怒って帰ってしまったのだろうか。

テーブルの上に洗顔の準備を整えた侍女が、シユエラに軽く頭を下げた。

そのしぐさに促されて、シユエラは慌ててベッドを降りる。ベッドの脇で待ちかまえていた侍女がガウンを着せかけてくれ、シユエラはテーブルの上に置かれた洗面器の前に立った。

冷たい水で顔を洗い終えると、ちょうどいいタイミングで侍女が顔をふくための布を差し出してくる。

お世話はきちんとしてくれるのよね……

でも打ち解けようという様子が、彼女たちにはまるでない。

昨日に引き続き居心地の悪さを感じながら、シユエラは促されてベッドの近くに戻る。ベッドの上には着替えが並べられていて、ガウンと夜着を脱がされたシユエラは、下着から順に着せられていく。

足を上げてください、腕を上げてください、と言われるままに体を動かしながら、シユエラは考え事をしていた。

今は侍女たちのことより、国王のことが気になる。

とはいえ、今更焦っても仕方ない。

「シユエラが眠りこけていたことで国王を怒らせたのなら、ケヴィンが何か言ってくるはずだ。

クリフォード公爵の子息であるケヴィンは、シユエラに愛妾あいしやうになることを持ちかけた人物だ。後見は身分が高い方がいいだろうからと公爵が引き受けてくれているが、実質的な世話はケヴィンが行っている。

ケヴィンは国王の側近で、シユエラの幼馴染であるエイドリアンを、先の戦争中に王族を守る楯とするためにのみ結成された親衛隊から、常時王族を守る近衛隊このえたいだに推薦してくれたのだという。そうしたつながりからケヴィンはシユエラのことを知り、王都から馬で往復十日以上かかるハーネット伯爵領にわざわざ出向いて、愛妾の件を要請した。

最初の印象は誠実そうでいい人だったけど、公爵邸で世話をしてくれていた時の彼の口癖は、「あなたは本当に伯爵令嬢なのですか？」だった。

シユエラはケヴィンから見て、貴族としてあまりに不適格だったらしい。会えば必ずくどくどくどくどくと説教する。

「……」

すっごい不機嫌な様子でたっぷり嫌味言われるかも……

今からげんなりしてくる。

着替えが済んで応接室に行くと、すでに朝食が並べられていた。

シユエラは朝食から目をそらし、こみあげてくるものをうっぷと呑み下す。

昨日と変わらなすぎつしりと詰められたパンのかご。大きなボウルにたっぷり盛られたサラダ。ワゴンにはやはりいくつもの容器が積まれている。

昨日の申し出は聞き入れられなかったようだ。

完食するのをあきらめることにして、テーブルに着いたシユエラはサラダと果物を少量取り分けてもらい、それと紅茶だけで食事を済ませた。

昨日もそうだけど、侍女たちは大量に食事を残してもとがめる様子がない。食べ過ぎをまぎらわせようと体を反らしただけで眉をひそめたのに。

もしかして王城では、大量に食事を残すのは当たり前のこと？

なんとこれもつたいない習慣だ。これを聞いたら弟たちは目をむいて「余ってるならオレにくれ！」と叫ぶに違いない。

弟たちのことを思い出して口元をほころばせると、侍女の一人が奇異きいの目をシユエラに向けた。

朝食が終わると、シユエラは放置された。食事の載ったワゴンと一緒に四人の侍女が退室し、残った侍女二人が扉のわきに立つてすましている。

「あの……」

「何でございましょう？」

「やった！ 返事あった！」

シユエラはこの機会を逃すまいと、意気込んで聞く。

「あなたたちのお名前は何というの？」

侍女は驚いたように目を見開いたが、すぐに取り繕ってつんとした。

「必要のないことと存じます。ご用の際は側にいる者にお申しつけくださいませ」

名指しで用事を言いつけてくれるな、という意味だろうか。

「あの……そうではなくてね？ お互い名前を知っていた方が、気心が知れるというか……」

「そのような必要はございません」

ぴしゃつと言いつけると、これ以上何も言うことはないとはかりに口元を引き締める。

もう一人の侍女も、拒絶するように決してシユエラの方を見ようとほしない。

仲良くなることをあきらめ、シユエラは尋ねてみた。

「これだけは教えてほしいのだけど、わたくしはこれからどうしたらいいのかしら？」

二人の侍女は互いを肘で突き合った。それが二、三度繰り返されたのち、先ほど答えてくれた方じゃない侍女が口を開く。

「お好きになさればよろしいかと存じます」

「お好きにとって……」

昨日来たばかりで右も左もわからないシユエラが、何をどう好きにできるといいのか。侍女たちはつんとあごを上げて、シユエラを無視する態度を取る。

不快に思われてしまうのは仕方ないにしても、この拒絶のされようは一体何なのだろう。愛妾——愛人だからというだけじゃないような気がする。

けれど理由を考えたところで、昨日初めて王城に上がったばかりのシユエラにわかるわけがない。

困窮生活で何事も惜しむ性格が身についているシユエラは、時間の無駄と割り切って疑問を頭の隅に押しやった。

すっと椅子から立ち上がる。

「散歩に行くてくるわ」

そのままの格好で廊下に行く扉に向かうシユエラを、侍女たちは声をかけて引き止める。

「お待ちください！ だいま着替えを用意いたします」

あ、そうだったわ……

一日中同じ服を着て過ごす生活をずっと送っていたから忘れてしまいがちだけど、貴族は外に出るにも着替え直さなくてはならないんだった。

「お、お願いね」

貴族らしくない行動をごまかすために作り笑いを侍女たちに向けると、二人そろって奇妙なものを見る目をして、「かしこまりました」と頭を下げた。

部屋着よりもリボンやレースなど装飾の多い外出用のドレスに着替えたシユエラは、侍女一人に付き添われて部屋の外に出た。階段室に向かって廊下を歩く。

西館の二階に部屋をもらっているシユエラは、美しい造りの階段を降りた。

一階に着くと、階段正面の開いた扉から庭の一部が見える。そこに植えられた花々の色鮮やかさに誘われて、シユエラはまっすぐ外に向かった。

扉の両脇に、灰色の制服を着た衛兵が立っている。

シユエラは二人に声をかけた。

「ごくりうさまです」

ぎよつとして身をひきかける衛兵たちの間を、何でおびえるんだろうと首をかしげながら通り過ぎる。

扉の先は広い広い庭園だった。

「うわあ……！」

シユエラは思わず感嘆の声を上げる。

薔薇ばらの生け垣、花に埋め尽くされた花壇が、見渡す限り広がっている。石畳の道を歩きながら、シユエラはまるで夢の世界にいるようだと思った。公爵邸にも美しく整えられた庭があっただけど、ここはその何倍もの広さがある。

維持するのにどれくらい費用がかかっているのかしら……？

庭の美しさに感動する感性を持ち合わせていながら、シユエラの思考の行きつく先はそこだった。

つばの広い帽子をかぶった庭師たちが、庭のあちこちで作業をしている。話が聞けなかなと一番近い庭師のもとへ歩いていこうとしたところで、後ろから声をかけられた。「シユエラ嬢……」

シユエラはぎくつと立ち止まり、おそるおそる振り返る。いつの間にかケヴィンが側に来ていた。

黒髪に深い紺色をした瞳、目鼻立ちのくつきりした、りりしい顔立ちをした長身の男性。その彼が怒ったような顔をしているのに気付いて、シユエラは首をすくめた。

「あなたという人は朝っぱらからうるちよると……おとなしくしているということができないんですか？」

「……すみません」

だって貧乏性なんだもの。じっとしてるなんてできない。——という言葉は呑み込んでおく。

ケヴィンは横を向いて大きく息を吐き、もう一度シユエラのほうを見た。

「今日はあなたにお小言を言いに来たんじゃありませんか？」

「え？ 昨夜のことじゃあ……」

「昨夜のこととは何ですか？ わたしの知らないところで何かやらかしたのですか？」

眉間にしわを寄せるケヴィンに、シユエラは両手の指先をこねくり回しながらぼそぼそと答えた。

「昨夜陛下がいらっしやらないうちに、わたたくし眠りこけてしまつて……」

「何を言ってるのです？ 陛下が夜にあなたの部屋を訪れるわけがないじゃないですか」

「は？ あの、でも、わたし、あいしやう愛妾になつたんじゃ……」

国王からお呼びがかからなかったのだから、向こうがシユエラのもとを訪れるものだとばかり思っていたのだけど。

顔をしかめたケヴィンは、腰に手を当ててシユエラを見下ろした。

「わたくし」と言いなさい」

シユエラはあつと口を押さえる。所領で街の人と話していた時の癖がまだ抜けず、たまにうっかり「わたし」と言ってしまう。

ケヴィンはあきれ顔でため息をついた。

「結婚という制度で成立する夫婦とは違い、愛妾は、愛妾になる」と宣言しただけでは成立しないのです」

え？ それってどういうこと……？

首をかしげるシユエラに、ケヴィンは重々しく告げた。

「あなたには愛妾になる努力をしていただかなければなりません」

3 初めてのお茶会

「は？」

愛妾あいしよらになる努力？ 何それ。

「……口を閉じなさい」

眉間にわずかにしわを寄せたケヴィンは、「部屋に戻って話しましょう」と言っ
て、きびすを返して歩き出した。シユエラはそのあとに続く。

部屋に戻ると、ケヴィンは椅子を引いてシユエラに座るよう促うながした。座ると、ケヴィンはもう一つの椅子に座る。

テーブルを挟んで差し向かいになったケヴィンは、何を考えているのかわからない無表情で質問してきた。

「シユエラ嬢、あなたは愛妾とは何なのか、どこまで理解していますか？」

「ええっと……お世継ぎをもうけるために、王妃さま以外に陛下のお側そばに上がる女性だ

と……」

シユエラは頬ほほを赤らめる。何てことを言わせるのか。悪い人ではないと思うのだけれど、どうもデリカシーに欠ける。

羞恥しゆうちに頬をそめるシユエラを氣にした様子もなく、ケヴィンは話し始めた。

「そうです。我が国は、一人の男性が複数の女性を妻に迎えることを認めていません。ですが国王陛下にお世継ぎが生まれなければ国の一大事。そのため愛妾を置くことが古くから慣例的に認められています。早い段階から国王陛下には愛妾を持つことが推奨されてきました。しかしどなたも陛下の御心を射止めることができなかつたのです」

シユエラはおそるおそる手を挙げた。

「あの……お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何ですか？」

「今までどんな方たちが愛妾候補としてあがったんですか？」

「類稀たぐいまれな美貌の持ち主から未亡人まで、さまざまな女性がいらつしゃいました」

「……何人ほどの方が？」

「二十七人です」

はつきりと告げられた人数に、シユエラは仰天ぎやうてんしてのけぞる。そんな不作法にわず

に眉をひそめながら、ケヴィンはとどめをさした。

「あなたにはこれから、陛下に気に入られるよう努力していただきます。城に滞在を許可された期間は一カ月、その間に陛下の御心を射止めてください」

「そんなの無理です！」

シユエラは椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。

「美人や結婚経験のある方たちができなかったことを、み、見栄えのする顔でもなく恋愛経験さえないわたしに、できるわけじゃないじゃないですか！」

「安心していいです。陛下の好みの基準は、多分そんなところにはありません」

恥を忍んで告白した事実を、ケヴィンはさりげなく聞き流す。シユエラは勢い込んで尋ねた。

「じゃあどこにあるっていうんですか!？」

「それがわからないから、我々陛下は苦労しています」

本当に苦労していそうな口調のケヴィンに、シユエラはまたあんぐり口を開けた。

いちいち注意することに疲れたらしい。ケヴィンは小さくため息をついて、シユエラのだらしな顔から目をそらす。

「お会いできないのに陛下の御心を射止めるのは難しいでしょう。ですから陛下をお茶

の席に招待します。今日の午後に約束を取り付けました」

「だからそんなの」

無理、と続けようとした言葉を、言葉で遮おさえられる。

「いったん差し上げた援助金を返せとは申しませんが、あなたが愛妻あいしやうになれなければもちろん援助は打ち切ります」

シユエラはぐつと喉を詰まらせた。何だか「愛妻になる努力をしないなら、もらった援助金も返すのが筋だよ」と言外に告げられているようなプレッシャーを感じる。

今さら返すことなんてできない。最初にもらった援助金は所領の整備のためにとづくに使ってしまった。

他にも城に上がるために、ドレスをたくさん仕立ててもらった。その上、公爵邸に滞在した費用まで上乘せされたら、どのくらいの額になるのか恐ろしくて想像もできない。

黙り込んだシユエラに、ケヴィンは席を立ちながら言った。

「お茶の時間までに、どうにかして陛下に気に入っていただける方法を考えてください」

呼び止めて何か聞かなきゃと思うのに、何をどう質問したらいいのか見当もつかない。シユエラがぐるぐる考えているうちに、ケヴィンは侍女に二、三指示を出して部屋を出ていった。

愛妾あいしやうになるための努力なんて、恋愛経験のないシユエラがいくら考えたところで思いつけるものではなかった。

昼食が終わり片付けが済むと、応接室に一人だけ残って他の侍女は寝室に入っていく。しばらくしたところで一人出てきて、軽く頭を下げた。

「お着替えの準備が整いました」

ケヴィンが指示していったことだ。

寝室に入るとベッドの上に薄紅色の正装が広げられていた。シユエラは部屋着を脱がされ、侍女たちに囲まれて衣裳を身につけていった。

そう、散歩から部屋に戻りケヴィンが退室したあと、外出着からまた部屋着に着替えさせられているのだ。これが本日四度目の着替え。貴族の生活ってめんどくさい、とシユエラはつくづく思う。

コルセットで胸をぎゅうぎゅうに絞られ、襷ひだたつぶりのペチコートを穿はかされる。肩口のふくらんだ上衣うわぎに袖そでを通し、背面を紐ひもで閉じられてから、上衣の下にスカートが取り付けられた。

ペチコートがスカートを押し上げ、すそがふんわりと丸く広がる。

お茶の席つてことは、きつと椅子に座らなくちゃいけないわよね……

正装での着席の仕方は公爵邸で習ってきたが、初めての本番ということで慎重に手順を指折り数える。その様子を侍女の一人が白けた目で見ていた。

「化粧台の前にお座りください」

思わぬところで予行演習。座る際はごそごそと落ち着きないしぐさをしてはならない。あくまで優雅に気品高く。

目の前に大きな鏡があるおかげで、自分の動きをチェックできた。ちょっと気取った感じになったけど、まあまあうまくできたと思う。満足げに唇の端を持ち上げると、鏡に映った侍女の一人がそれに気付いたらしく、気味悪そうに表情をゆがめた。

侍女が二人がかりで髪をすき、それから一人が中心になってシユエラの髪を結い上げていく。シユエラの背中を覆うたつぶりの髪のほとんどが頭の後ろにまとめ上げられ、そこからおくれ毛のように幾筋かの毛先が背中に流される。寶石がちりばめられた手のひらほどもある銀の髪飾りを差し込まれて、シユエラの頭はいよいよ重たくなった。

お茶会が終わるまで耐えられるかしら……

その後薄く化粧をほどこされ、着替えがすべて終わったのは二時を少し回ったくらい時間だった。

まだ早い時間なのに、シユエラは侍女たちに促され、応接室で椅子に座って待たされた。柱時計は二時十二分、お茶にするにはまだ早い。

胴はぎゆうぎゆう、頭はぐらぐら。こんな状態で三時のお茶の時間まで過ごさなくてはならないなんて拷問に等しい。謁見の際の不自然なポーズといい、高貴な人間は拷問が好きなんじゃないかと疑ってしまう。

しかもすでにお茶の準備は万全に整えられ、侍女たちがざらりと並んで控えているものだから、暇つぶしをするのはもちろんのこと、重い頭を支えるためにソファに沈み込むこともためらわれる。

そんな状態でじりじりと時間は過ぎていった。

二時五十分、二時五十五分、二時五十八分……

もうすぐお茶会が始まる。お茶会が終わればこの格好をすぐ解くことができる。

それだけを励みに我慢し続けたのに、三時を回っても国王は訪れない。

お茶を淹れるためのお湯は、三回運び直された。

侍女たちも焦れてきたのか、もじもじと動いたり、隣同士目配せで何か伝え合ったりしている。

国王が訪れたのは、もう少しで四時を回るといふ頃だった。

廊下の方から何やら聞こえてきて、それが次第に大きくなってくる。

ようやく来たかとほっとして、シユエラは迎えるために椅子を立てて扉の方を向いた。人の声や足音が部屋の前までやってきたかと思うと、ノックもなしに勢いよく扉が開かれる。

扉を大きく開け放つのは、ラウシュリッツ王国国王シグルド。

おじぎをしなくてはならないのに、シユエラはうつかり忘れて見入ってしまった。

ああ、この瞳……

謁見の間でシユエラを見下ろしてきた、鋭利な、憎しみすら感じる群青色の目。

「シユエラ嬢……」

ため息まじりのケヴィンの声に、シユエラは我に返った。

あ、おじぎおじぎ。

シユエラは慌ててドレスのスカートをつまみ、腰を低くして頭を下げる。

扉を開けたところで一旦立ち止まっていた国王シグルドは、腰に提げた剣を外しながら大股に歩いてきて、外した剣をケヴィンに預けると、椅子を乱暴に引きどかすと腰を

下ろした。

うわすつごい不機嫌。

ここからどうしたらいいものかとケヴィンにちらりと視線を向けると、ケヴィンは洪々といった顔をしてあごをしゃくる。座れという意味だろう。シユエラはスカートが不格好にならないよう、細心の注意を払って腰かけた。

二人の侍女がお茶の支度を始める。茶葉の入られたティーポットにお湯が注がれ、カップはお湯で温められる。

お茶が淹れられている間、シグルドは腕組みをして背もたれに体を預け、目を閉じていた。

毛先の少しはねた金茶の髪、きりつとした眉。通った鼻筋。血の気の薄い唇。すつきりしすぎの頬からは、幾分やつれた印象を受ける。

それでも群青の瞳が開かれると、野性を帯びた力強い顔立ちになる。

今日は重いマントもなく、金系銀系で装飾された華美な衣装でもなかった。ケヴィンともう一人のお付きの人と同じような、上質そうだけど無駄な装飾のない衣服だった。

カップの湯がワゴンの下の段の瓶に捨てられ、蒸らし終えた紅茶が注がれる。

ティーソーサーに載せられたティーカップが、何も入れられないままシグルドの前に

置かれた。

シユエラは思わず口を開く。

「あの、お砂糖は……」

シグルドの背後に控えていたケヴィンが、すつと近付いてきてシユエラに耳打ちした。

「陛下は甘いものがお嫌いでしたっしやいます」

シユエラの後ろまでワゴンを押してきた侍女が、シユエラに声をかけた。

「どのようないたしますか？」

「あ……わたくしもそのままです」
少し考えつつシユエラは答える。何も入れられない、淹れたての紅茶が目の前に置かれた。

シユエラの前にお茶が置かれる前から、シグルドはさっさと紅茶に口をつけていた。シユエラも口に運ぶが、熱すぎて少しずつか飲めない。シグルドも同じらしく、顔を

しかめながらせつせつとする。

シグルドは明らかに飲み急いでいた。

その様子をちらちらとうかがいながら、シユエラは心の中でつぶやく。

陛下が愛妾をお嫌いだなんて言っただけじゃ……

シグルドとはこの間の謁見えっけんが間違いなく初対面だ。なのに強烈な感情をぶつけてくるのは、シユエラ自身ではなく、立場を見ているからだと思う。

愛妾候補あいしじょう。

欲しくもないのに二十七人——いや、シユエラを入れて二十八人か。そんなに送りこまれては不機嫌にもなるだろう。

愛妾の存在そのものがお嫌いな方に、どうやって好かれるというの？

シグルドの後ろに戻った人物をこっそりにらみつけてやるが、ケヴィンはシユエラの視線を無視して、話しかけると言いたげにあげを動かす。

話しかけると言われたって、不機嫌をまきちらし目も合わせようとしない人に、何をどう話しかけられるというのか。

無理をしながら紅茶を飲み干したシグルドは、カップをソーサーに戻して立ち上がった。

「陛下、お茶の時間は終わっております。ご着席ください」

出口に向かおうときびすを返したシグルドの行く手を、ケヴィンが体でふさいで止める。

シグルドはそんなに背が低い方ではないと思うのだが、こぶし一つ分かもう少し背の



高いケヴィンと並ぶとまるで成長期の兄と弟のようだった。

肩を押さえるケヴィンの手を、シグルドは腕を上げて振り払い怒鳴った。

「おまえの言う通り一緒に茶を飲んだ！ それでも不服か！」

「陛下のご休憩の時間はまだ終わっておりません」

「休憩!? 余に休憩などしている暇があるというのか!? 協力という言葉をどこかに置き忘れた長官どもがのらりくらりと話をかわすせいで、どの案件も遅々として進まない！ おかげで各地から送られてくる陳情書は山のようにだ！ おまえたちもその処理に追われて休んでいる暇などないではないか！」

「ですが、根を詰めたところで速やかに片付くというものでもありません。休憩を取つてからの方がはかどることも」

ケヴィンの説得の言葉を、シグルドは怒りを込めて遮る。

「これのどこが休憩だ!? 会いたくもない女と引き合わされ、差し向かいに茶を飲まされて、まるで拷問じゃないか！」

拷問——

「ぶっ」

うっかり噴き出してしまったシユエラは、二人にらみつけられて慌てて口を押さ

えた。

「申し訳ありません」

何とか笑いを呑み下し、シユエラは立ち上がった。

「わたくしが陛下にお茶を淹れて差し上げますわ。それを飲んでいただけましたら、すぐにお見送り申し上げます」

ワゴンに歩み寄り、側に立っていた侍女と場所を代わってもらう。

「シユエラ嬢、あなたは何を勝手なことを」

ケヴィンにとがめられても、シユエラは全く気にせず作業を始める。

「今の陛下に休憩をと申し上げても無意味ですわ。それよりも飲むだけで疲れが吹き飛ばお茶の方が、きっと効果があります」

おしぼりで手をふいてから、小さなまな板の上でレモンを半分に切り、カップの中に汁を絞り出す。

別のカップに、ポットに残った紅茶を半分注いだ。蒸らしすぎて濃い目になった紅茶に、はちみつをティースプーンで二杯垂らす。くるくるとかき回してはちみつを溶かすと、種が入らないようスプーンで押さえながらレモンの汁を加える。軽くかき混ぜてからティースプーンで味を確かめると、ソーサーに載せてシグルドに差し出した。

「立ったままシユエラのことを眺めていたシグルドは、差し出されたものに眉をひそめる。

「余は甘いものが嫌いだと聞かなかったか？」

「聞きました。ですから甘くありません。どうぞお薬だと思ってお召し上がりくださいませ」

にっこりと笑いかけると、シグルドは警戒した目をシユエラに向けたまま、カップを持ち上げ一口含む。

「……飲める」

つぶやくと、カップをあおって一気に飲み干した。シグルドはソーサーの上にカップを返す。

受け取ったカップを落ちないように手で押さえ、シユエラは頭を下げた。

「それではお約束通り、お見送り申し上げます」

ケヴィンは一連のやりとりを啞然としながら見つめている。その目の前をシグルドに続いてシユエラが通り過ぎた。

シグルドは勢いよく扉を開け放ち、振り返ることなく歩き出す。

その背に頭を下げながらシユエラは言った。

「どうぞご自愛くださいませ」

シユエラの両脇を、ケヴィンともう一人のお付きの人が通り過ぎた。部屋の中からはすでに見えなくなったシグルドを、早歩きで追いかける。

顔を上げると、閉まらないように扉を押さえていたエイドリアンと目が合った。近衛隊士だから、シグルドに付き従い護衛しながら、こうした役目も担っているのだろう。

シユエラがにっこり笑いかけると、エイドリアンは何か聞きたそうな視線をわずかにさまよわせた後、一礼して扉を閉めた。

はー、やれやれ。やっと重装備を解ける。

シユエラはカップを侍女に渡し、のろのろと寢室に向かう。侍女を待ち切れず、歩きながら両腕を上げて自分で髪飾りを外そうとしているところへ、トトトンとせわしないノックの音がした。

「わたしです」

侍女が扉を開けると、ケヴィンは侍女を押しつけるように入ってきて、シユエラにずんずんと迫ってくる。

「あなたは何を考えているのですか？ せつかく陛下を説き伏せて作った機会を無駄に

するような真似をして。あなたは本当に、陛下の愛妾あいしやうになる気があるのですか？」
 がみがみ言うケヴィンに向き直り静かに聞いていたシユエラは、顔を上げてケヴィン
 の黒にも見える紺色の瞳をまっすぐ見た。

「陛下に必要なのは、愛妾ではなく休息ではありませんか？」

シユエラの真剣な表情にケヴィンはわずかに目を見開く。一瞬の後、ケヴィンはあー
 と長いため息をついた。

「休息も確かに必要ですが、お世継ぎが必要なのも確かです。陛下には一日も早くお世
 継ぎが必要なのです。愛妾になれなければ、あなたを実家に帰します。援助金を返せと
 は言いませんが、あなたが着ているドレスも今つけている髪飾りも返していただきます。
 以前の生活に戻るのですよ？ そのことをわかっているのですか？」

ケヴィンは貴族とはとても思えないシユエラの家のつましい生活を知ってるから、脅おど
 しになると思って言っているのだらう。だが、ドレスなどは返すだけでいいと知ってシユ
 エラはほっとする。そしてケヴィンに、残念そうな微笑みに向けた。

「……その時は、一時的いつときに夢を見たと思ってあきらめます」

4 ただの紅茶の、ひみつでも何でもないヒミツ

ケヴィンには叱られたが、シユエラはシユエラができる精いっぱいのことをしたつも
 りだ。それでもダメならあきらめるしかない。

国王シグルドとのお茶の席があつた日から三日目、昼前にケヴィンがシユエラの部屋
 を訪れた。

侍女に出迎えられたケヴィンは、椅子から立ち上がるとするシユエラの横に視線を
 落とした。

白い小さな布が畳まれ、積み上げられている。一山はただの布切れ、もう一山はレー
 スで縁取よことられたもの。

ケヴィンの視線に気付いてシユエラはとつさに隠そうとしたが、すで見られてし
 まったものを隠しても仕方ないと思い直し、伸ばしかけた手を引っ込めた。

シユエラが作っているのはレースのハンカチだ。白い布をレース編みで縁取りしただ

けのもの。実家で行っていた内職だ。レースのハンカチは貴族や裕福な家の娘の間で流行しつつあり、作れば作るだけ売れる。

クリフォード公爵邸でお世話になっていた時、内職をしていると正直に話して叱られた。

貴族は普通、平民のように物を作ってお金を稼いだりしない。そうした行為は恥とみなされている。

けれど、日に何時間か内職をするのは、シユエラにとって身に付いてしまった習慣だった。やらないと落ち着かない。そう話してお願いして、趣味ということで通すのならば許された。

許可してくれたものの、ケヴィンはいい顔をしない。今も内職しているのを見て顔をしかめた。

が、見なかったことにしようというのか、表情を改めてシユエラを見る。

「陛下が先日のお茶をご所望です。午後、陛下をお迎えする準備をしてください」

「わかりました」

シユエラが答えたあと、しばしの沈黙が降りる。

他に用事がないのなら、内職の続きをしたいのだけど……

ケヴィンがいるのに内職を再開するわけにはいかないだろう。

黙って見つめ合いつつもシユエラが焦れてきた頃、ケヴィンは彼女から視線を外し、額を押さえた。

「何か言うことはないんですか？」

「何をです？」

「陛下からお声がかかってうれしかったと驚いたとか、何も思うことがないのですか？」
何が気に入らないのかしら？

いらだった口調に、シユエラは首をかしげる。

「そうですね。私の淹れたお茶を陛下が気に入ってくださったようでうれしいです」

「……秘密裏に売買されているような、怪しい薬を入れたりしてないですよね？」

シユエラは目を見開いて顔を上げた。

「まさか！ そんな珍しい薬を手に入れるお金があつたら、実家の食費に当てています」

「でしょうね……」

ハンカチの山に目をやりながら、ケヴィンはため息をついた。

先日の長時間の苦痛から、国王をお迎えする際は部屋着かせて外出着にしたいと願

い出ると、ケヴィンは渋い顔をしながらも「外出着なら」と承諾した。昼食後、若草色の外出着を着て、廊下にくつろぎ扉の脇に置かれたソファに座って内職をしながら待つ。侍女たちはお茶の支度を整え、並んですましている。

三時を回ってすぐに廊下ががやがやと騒がしくなったので、シユエラは内職の道具をまとめ、上に布をかぶせて隠した。ソファから立ち上がり、テーブルのところに移動しようとする。

けれどシユエラがお迎えする位置に着く前に、ドアノブががちゃつと音を立てた。シユエラはとっさにドアの方を向いて礼の姿勢をとる。

前回同様、勢いよく扉を開け放った国王シグルドは、目の前で礼を取るシユエラにわずかにのけぞった。シユエラはレデイらしくつましやかな笑みを浮かべて道をあける。「おいでくださり、ありがとうございます。どうぞ」

シグルドが席に向かうのを見送ってから、シユエラも移動しワゴンの前に立った。

濃い目の紅茶を淹れ、はちみつをお茶で溶いて、絞ったばかりのレモンの汁を加える。何故か知らないけど、侍女たちのシユエラの手元を見る視線が痛い。

「どうぞ」

出来上りはどうしてもぬるくなってしまおうそれを、シグルドはぐいっと一気に飲み

干した。カップを置くと、すぐに立ち上がる。

「陛下！」

ケヴィンがいさめようと呼び掛ける。それを遮るおどかるように、シユエラは丁寧にあいさつした。

「わたくしの淹れたお茶をお召し上がりくださり、ありがとうございます。それではお見送り申し上げます」

ケヴィンは勢いよく振り返り、シユエラを叱り付けようとする。

「シユエラ嬢！ あなたは」

その声もシユエラは遮った。

「わたくしは三日前に陛下とお約束したのです。わたくしの淹れたお茶をお召し上がりいただいたら、すぐにでもお見送り申し上げます」

笑みを浮かべながらも強い口調で言い切ると、驚いた顔をして振り返っているシグルドにほえんで手を差し出し、扉の方へと案内する。

ケヴィンは不承不承ふじょうふじょうといった様子で押し黙り、もう一人のお付きの人と一緒にシグルドのあとに続いた。

外に出たシグルドに、シユエラは丁寧におじぎをした。

「本日はありがとうございます。どうぞご自愛くださいませ」
扉が閉まるまで、シユエラはそのまま頭を下げ続けた。

次にお茶の話が来たのは、それから二日後だった。

三度目のお茶の後、ケヴィンに聞かれる。

「あのお茶は一体何なのですか？」

「ただの紅茶ですけど？」

肩をすくめて遠慮がちにほほえむシユエラに、何をどう問えばいいのかわからなくなったらしいケヴィンは、口を開いては閉じを数度繰り返したところであきらめて帰っていった。

その翌日のお茶の席で、シグルドから尋ねられた。

シユエラの淹れたお茶を飲み干したあとシグルドは仏頂面ぶつどうめんで、傍らに立つシユエラに「座れ」と言った。

今日はすぐに行ってしまわないのかしら？

不思議に思いながら席に着くと、シグルドは少し身を乗り出すようにして問いかけて

きた。

「この紅茶は一体何なのだ？」

真剣な面持ちで尋ねてくるものだから、うっかり笑ってしまいそうになる。

口元を指の先の方で淑女らしく隠して笑いをおさめ、シユエラは聞いた。

「わたくしのお茶はそんなによく効きましたか？」

シグルドは体をひいて洗面しほうめんを作り、うめくように答える。

「効いたなんてものじゃない。この紅茶を飲んでからしばらくすると、頭の中のもやが払われて執務がはかどるんだ」

背もたれに背中を預けながらうなだれ、まるで完敗したというような風情だ。内心おかしく思いながら、シユエラはにつこり笑う。

「それはようございました」

「だからこれは何だと聞いている」

むすっとしたシグルドに、これ以上はぐらかしてはダメよねと思い、シユエラは答えを口にした。

「ただの紅茶ですが、言うなれば風邪薬です」

「風邪薬!？」